

神功皇后物語の形成と展開

高 寛 敏

はじめに

第一節 古代神功物語の形成

第二節 中近世の神功

第三節 近現代の神功

おわりに

キーワード：天武記定本、「百濟記」、新羅畜
生観、天下祭り

はじめに

日本史上、古代から最も著名な人物といえば、神功皇后という女性である。神功皇后は、日本最古の古典、『古事記』（712年）・『日本書紀』（720年）によれば、第14代仲哀天皇の後で、応神天皇の母である。ところで、仲哀・神功・応神などという漢風諡号は、『古事記』・『日本書紀』にはみえず、それは後世に付加されたものである。しかし『古事記』・『日本書紀』に記されたその実名は複雑なので、一般には漢風諡号が通用している。それでここでもそれに従うことにする。ただ『古事記』・『日本書紀』が対象にした7世紀までの歴史では、「日本」・「天皇」は「倭国」・「倭王」と称されていたので、それは史実を生かして、「倭王仲哀妃の神功」というような表現を用いることにする。

ところで、神功は虚構の人物なので、戦後の歴史教育からは追放され、最近の若者にはその知識があまりないようである。しかし、学問上で依然として重要な研究対象であるばかりでな

く、あたかも実在人物として過去に活躍したというような内容の読み物が、現在でもしきりに出版されており、かつ、社会にはその痕跡がいろいろな形でとどめられていて、人々の歴史をみる目をくもらせている。

神功が虚構の人物であることを否定する学者は、現在ではないかと断言できると思うが、それで問題がすべて解決できるわけではない。なぜこの人物が史上に登場するようになったのか、そして歴史的・思想的にどのような影響を及ぼし、現在にまで至っているのかが、解明されなければならないからである。そのうえで、今後何をなすべきかを問うてみる必要があるであろう。

第一節 古代神功物語の形成

『古事記』・『日本書紀』の語る神功物語は単純ではないが、当面、関心の赴く部分を『古事記』によって示すと、次のようである。

仲哀が神功とともに九州のクマソを討とうとして香椎宮に至ったが、そこで神託をえた。神はクマソよりも、西方の金銀珍宝のあふれる国を討てと命じたが、仲哀はそれを無視したので、神罰をえて急死した。そこで大祓をしたあと、建（武）内宿祢が神のお告げを請うた。神が告げるに、「これは、アマテラス大神の御心である。またわれはツコツツノヲ・

ナカツツノヲ・ウハツツノヲの、スミノエ（墨江、住吉）の三柱の大神である。今、まことにその国を求めたいと思うなら、天つ国・国つ神と、山の神と、河や海のもろもろの神とに、ことごとく幣帛を捧げ祭り、わが御魂を船の上に置き祀りて、真木の灰をヒサゴの中に入れ、また箸と平皿を山のごと、作り備え、それらをみな、大海に散らし浮かべながら渡り行くがよいぞ」と教えた。そこでそのとおりにすると、大小の魚が集まって船を背負い、波は津波のごとくに新羅の国に押し寄せ止まって、その国の半ばにまで至った。それをみた新羅王は畏れ慄いて、「今より後は、倭国の大君の仰せのままに馬飼いとなり、年ごとに船を並べ、船腹を乾かすことなく、船の棹や楫を乾かすことなく、天と地がある限り、常に永久にお仕えいたします」と誓った。そこで、新羅を御馬飼いと定め、百済の国を渡りの屯倉と定めた。そして神功は、新羅王の門に杖を衝き立て、スミノエの大神の荒御魂とし、祭り鎮めたうえで帰って来た。神は仲哀死去に先立って、「およそこの国はそなたの腹の中に坐す御子が続べたもう国であるぞ」と告げたが、神功は新羅より帰って、筑紫の宇美で応神を生んだ。

つまり、神功物語のもっとも重要な部分は、神功がアマテラスの御心により、住吉大神の神助をえて、武内宿祢とともに新羅を屈服させ、新羅を「御馬甘」、百済を「渡屯倉」と定めたことと、神功はアマテラスの加護の下に応神を生んだ、ということである。

『日本書紀』は同様の話とともに、他の多くの記事を加えている。

- ①『古事記』には年紀がないが、『日本書紀』は同様の事件を200年のこととし、新羅王だけでなく、百済王、高麗王も「西蕃」を

称して朝貢を誓ったので、神功はこの三国を「内官家屯倉」と定めた。これがいわゆる「三韓」であるという。

- ②神功紀49年条。木羅斤資と沙々奴跪に命じて、新羅を撃破した。そして「比自怵・南加羅・喙国・安羅・多々羅・卓淳・加羅」の七国を平定した。それから兵を西に移動して、古奚津に至り、南蛮の枕弥多礼を屠って百済に賜った。そこで百済の肖古王と王子の貴須が軍を率いて来会した。その時、比利・辟中・布弥支・半古の四邑を自然降伏させた。
- ③神功紀51年条。千熊長彦を百済に派遣すると、百済王は末永く忠誠を誓い、その翌年に千熊長彦に久氏をつけて七枝刀一口・七子鏡一面および種々の珍宝を献上した。
- ④神功紀62年条。新羅が朝貢しなかったので、葛城襲津彦を遣わして新羅を討たしめた。（分注所引「百済記」記事の要点―千午の年に沙至比跪に新羅を討たしめたが、沙至比跪は新羅の美女を迎え入れて、反って加羅を討った。加羅国の通報をえて天皇は大いに怒り、ただちに木羅斤資を遣わして兵衆を率いて加羅の社稷を復せしめた―）

応神紀・雄略紀にも一連の記事がある。

- ⑤応神紀3年条。百済の辰斯王が立って、貴国の天皇に対して礼を失した。そこで紀角宿祢らを派遣して詰問させた。百済国は辰斯王を殺して謝罪した。紀角宿祢らは阿花を立てて王とし、帰国した。
- ⑥百済人が来朝した（分注所引「百済記」に、「阿花王が立って貴国に礼を失したので、わが枕弥多礼および峴南・支侵・谷那・東韓の地を奪われた。そこで王子直支を遣わして先王の好みを脩めた」）。
- ⑦応神紀16年条。この年に百済の阿花王が死

去した。そこで天皇は直支を召し、東韓の地を賜って帰国させた（分注。東韓は甘羅城・高難城・尔林城である）。

- ⑧応神紀25年条。百済の直支王が死去した。ただちにその子の久尔辛が立った。王は幼少であったので、木満致が国政を執った。満致は王母と密通し、無礼な振る舞いが多かった。天皇はこれを聞いて満致を本国に召喚した（分注。「百済記」によれば、木満致は木羅斤資が新羅を討った時に、その国の婦人を娶って生んだものである。その父の功によって、わが国にやって来て、わが国の政治を執った。権世は世に並びなかったが、天朝はその横暴を聞いて召喚した）。
- ⑨雄略紀20年条。高麗王が大いに軍兵を発して百済を討った（分注所引「百済記」によれば、蓋鹵王乙卯年冬、貊の大軍が来攻し、王および太后、皇子らがみな敵手に没した）。

『古事記』は抽象的で荒唐無稽であるが、『日本書紀』には一連の記事として、具体的な朝鮮人名や地名がみえており、それは分注によると、「百済記」という、百済史料に基づいているらしいことなどから、『広開土王碑文』・石上神宮所蔵『七支刀銘』と絡み合わせて、年紀だけ干運二運下げると、『日本書紀』の後半から雄略紀にかけての記事は、ほぼ事実を伝えていられるとされてきた。これに対する私見は次のようである。

第一、『古事記』と『日本書紀』は天武10年記定本を底本として、それぞれに完成された。『古事記』の方はほぼ記定本に沿っているが、『日本書紀』は記定本を底本としながらも、各種の史料や異伝を総合して編纂された⁽¹⁾。その際、個々の事件記事をまとめたものを原本、原本をつなぎ合わせながら、一応の本文を完成し

たのが稿本、稿本に主に漢籍による潤色を加えながら、稿本と異なる原本記事を分注として付注したのが完成本である⁽²⁾。編纂作業には三段階があり、各段階で潤色・改編が加えられた。「百済記」は原本の一つであるが、それは百済史料ではなく、後述の木満致関係記事などに、継体・欽明紀に用いられた「百済本記」という原本の、原史料に出ていた人名や地名を借用しながら造作した史料である。稿本は⑨以外の記事を2群に分け、そのうちの木羅斤資・木満致父子関係記事を干運一運繰り上げ、神功・応神代としたのであるが、完成本は神功を卑弥呼に同定しながら、稿本記事を一様にまた二運繰り上げたのである。結果的に干支三運繰り上げられた木満致関係記事が示唆する事実とは、まず429年に百済将の木羅斤資と倭将の沙々奴跪が「任那」に共同出兵して、ある程度の成果を上げたこと（②）があるが、「任那」を「加羅」等七国と改変したのは、完成本の段階であろう。「任那」とは、金海の加羅を中心に、釜山東萊の居柒山国、昌原の卓淳や喙己吞を網羅した南海岸部の小国の政治連合体であって、加羅王は任那王とも称された。自然降伏した四邑や「南蛮枕弥多礼」関係記事の地名は、白村江戦闘で惨敗した倭軍の一部がとった退却路の史料の借用であろう。

次は壬午年（④）の葛城襲津彦の加羅襲撃事件であるが、それは沙至比跪（欽明紀の大伴狭手彦）を参考にした造作文で、木羅斤資以外の人名は「百済本紀」の原史料から借用したものである。それがいわんとすることは、429年の「任那平定」について、442年に高霊の加羅を征服したことであるが、もちろん史実ではない。

⑧は木満致横暴記事であるが、それはほとんど潤文であって、史実は474年に木満致が来倭して倭に出兵を促したが、475年（蓋鹵王乙卯

（1）拙稿「『古事記』と『日本書紀』の成立」、朝鮮大学校学報5、2002年。

（2）拙稿「『百済記』関係記事」、拙著『古代朝鮮諸国と倭国』雄山閣、1997年。この前後の記述はこれによる。

年)に百済王城が陥落した(⑨)ことである。

結果として干運二運繰り上げた記事は、潤色を除けば、次のような事実を伝える。360年代に百済・倭関係が成立し、それを記念して百済側が倭王に「七支刀」を贈与したこと(③)、397年に百済太子直支(腆支)が来倭して倭の出兵を促したこと(⑥)、407年に百済の阿花王が死去したので、直支が帰国して即位したこと(⑦)である。一連の記事の中で、⑤は「百済記」にもなかった完全な潤色である。

第二、『古事記』・『日本書紀』の王統譜は、6世紀中葉の欽明代、7世紀前半の推古・舒明代、天武10年記定本という過程を経て、素案が完成したが、各段階で王統譜は大きく改変された。次のように、第一段階では神功は登場していなかったものであり、したがって、それに関する『古事記』の物語、『日本書紀』の①は史実とは無関のことである⁽³⁾。

神功は第二段階で登場したが、その名はオホタラシヒメであって、オホタラシヒメは新羅ではなく、クマソを討伐し、その過程で神の子として応神を生むという筋立てになっていた。さらに神功は第三段階で、その名がオキナガタラシヒメと変わり、クマソではなく、新羅を討つということになったのである。そうなった理由は、天武記定本当時、倭に亡命していた百済王族は、百済王氏というウヅ名を称して、倭王の臣下になっていたということにある。百済王はもともと倭王からその領土を贈与され(渡屯倉)、倭王に臣属する存在であると説かれたのである。そのためには天武当時、旧百済領を支配していた新羅を討って、そして百済王にその領土を与えたこと、そして百済王は歴代、いかに倭王に忠節を盡したかを語る必要があったのである。

神功の登場は第二段階であるが、それは蘇我氏の修史事業に関係する。この段階で、倭王の

通名は「阿每多利思比孤」(『隋書』。天帝の子の意)とされ、その王統譜は高句麗に匹敵するものとされた。そして「多利思(帯)」の王、あるいは王妃として、東征西征を果たした景行(オホタラシオシロワケ)と神功(オホタラシヒメ)が創出され、葛城氏と蘇我氏はともに景行の子孫で、かつ神功を助けてクマソ征討を成功させた武内宿祢の裔とされた⁽⁴⁾。そして一方、史実としての葛城氏と蘇我氏の関係は、葛城氏出身の仁賢が倭王となったとき、葛城氏の女性と結婚した木満致(蘇我満智)が葛城氏を継承し、その子の稲目がソガの地に居住して蘇我氏を称したというところにあると思われる。

このように、神功の「三韓征討物語」は虚構の産物である。しかし、720年に『日本書紀』が完成すると、それは次第に史実として定着していった。新羅と倭の関係は以来、次第に陰悪化し、12世紀中葉にはほとんど断絶状態となったのである。

第二節 中近世の神功

8世紀になると、次第に神仏習合の現象が表れ始めるが、その先駆であり、チャンピオンであったのが八幡神である。八幡神は隼人征討の守護神として豊前の宇佐で創出されたが、養老4年(720)に征隼人持節大將軍となり、その後、神亀4年(727)に大宰帥に任命され、730年に帰京した大伴旅人や、豊前国守宇野首男、筑前国守山上憶良らにより、この対隼人神は唐の軍団制に関連する「八流の旗(幡)」に因んで八幡神、誉田皇子(後の応神)霊とされたと思われる。それは天然痘の大流行、対新羅関係の悪化、国分建立詔の宣下を背景に、さらに聖武や藤原氏によって、天平9年(737)以前に正式に承認され、八幡は誉田皇子霊、鎮西の軍

(3) 拙稿「神功物語の形成」、拙著『倭国王統譜の形成』雄山閣、2001年。

(4) 拙稿「武内宿祢物語の形成」(注(3)拙著)。

神、仏法擁護の至高神となり、やがて8世紀後半には八幡神自身が出家して八幡大菩薩となった。このとき、誉田皇子霊は応神天皇霊となったのである⁽⁵⁾。

八幡神は東大寺大仏の鑄造に際して、すべての神祇を率いてその成功に寄与したとあり、その功により、大仏本体の鑄造が完成した天平勝宝元年(749)、東大寺の鎮守として宇佐神宮から都に勧請された。さらに貞観2年(860)に平安京近郊の男山に勧請されて(石清水八幡宮)、王城鎮護の神となり、当初から「皇大神」とか「我朝大祖」とも称され、伊勢神宮に次ぐ国家第二の宗廟ともされた。応神が鎮西の軍神、さらには王城鎮護の神となったのは、まさに神功の胎中であって新羅を討ち、凱旋後に九州で誕生したからに他ならない。宇佐八幡宮(天平13年に「八幡神宮」とされた)・石清水八幡宮の成立は、同時に神功英雄視、あるいは「三韓征討」の史実としての確信が深く浸透していたことを示す。

八幡神発展のもう一つの契機は、武家の源氏が八幡神を氏神としたことで、源頼朝は治承4年(1180)に鎌倉に鶴岡八幡宮を建立した。そして鎌倉時代には、守護・地頭により八幡神は全国的に勧請され、源氏の氏神から武家・武門の神となった。室町幕府を開いた足利氏も源氏の一流であったので、その時代にも八幡信仰はひき続いて高まり、それは同時に神功物語が拡散してゆく要因となった。

八幡信仰が高まる中で、応神が生まれたとされる九州を中心に、八幡宮とその母の霊験譚がいろいろとつくられた。鎌倉時代にそれは石清水で蒐集され、文永11年(1274)・弘安4年(1281)の蒙古襲来後の間もなく、それは『八幡愚童訓』の甲本と乙本として集大成された。蒙古襲来の際の、八幡神の「百王鎮護異賊降伏

ノ大菩薩」としての、その霊験譚が語られたばかりか、古代とは異なる、中世的神功物語が叙述された。それらを要約すると、最初に塵輪という鬼神が来襲して仲哀を殺したこと、神功(香椎大明神—香椎は石清水の末社)が高麗(新羅)征討に当たって、まず四王寺山に登って祈願したこと、住吉大神だけでなく、肥前の河上大明神も同行したこと、この河上大明神が竜宮から干珠満珠を請来したこと、楽を好む志賀島の鹿嶋大明神の安曇イソラを梶取としたこと、干珠満珠を用いて高麗王を屈服させたこと、高麗王が「我等此則日本国為犬而守護日本国」などと誓ったこと、岩石に「高麗国ハ日本国ノ犬也」と書き付けて凱旋したが、これが犬追物の起源となったこと、さらに厳島・宗像・諏訪・熱田・三島・高良の大明神と宝満大菩薩が影向したこと、また安曇イソラは、「筑前国ニテハ^{シカノシマ}鹿嶋大明神、常陸国ニテハ^{カシマ}鹿嶋大明神、大和国ニテハ春日大明神ト申ケリ。一体分身、同躰異名ノ御事也」と理由付けられて、常陸の鹿嶋大明神、大和の春日大明神も一行に加わったことになっている⁽⁶⁾。その最大の特徴は、全国の主要な神々がみな神功に随従したこと、そしてそこに高麗に対する畜生観がみられることである。

『八幡愚童訓』の影響は大きく、八幡関係神社だけでなく、影向神関係神社も悉く自社の神を神功物語に結びつけた縁起譚・霊験譚をつくって喧伝した。例えば志賀海神社では、近世初期には1月2日、宮司が神伝の謡曲『わたつみ』を社前で謡いぞめしたが、その中には「おきながたらし姫のみこと、異国退事の御時、(中略)、されば皇后は此御神の神力にて、三韓事ゆへなく神慮のままにしたがへ、あめとひとしき御調物、今に至りてちいほ秋水穂の国もおだやかに、民安全にゆたかなるも、ひとへに当社わたつみの御神徳そめでたき」⁽⁷⁾という文言があった。

(5) 拙稿「八幡神の成立と展開」(注(3)拙著)。

(6) 多田圭子「中世における神功皇后像の展開」、『国文

目白』31、1991年。

(7) 「わたつみ」神道大系編纂委員会『神道大系、神社 』

この博多の志賀神と同一視された常陸の鹿島神宮も同様であった。その例大祭は神功の「異国降伏」・「三韓征伐」を内容としていることがその証左である。また寛文5年(1665)刊の『肥前古跡縁起』によれば、「河上与止日女大明神、本地十一面観音菩薩、神功皇后の妹也。蒙古退事の時、長門の沖にて竜宮に至り給ひ干珠満珠の二つの宝を借承給ひし姫宮也」。「又毎年正月七日の夜は国司御参詣在べし。御神前に甲冑を帯し馬を乗り給ひ、弓の裏筈にて、新羅国の大王は日本の犬也と、文字を庭上に書付給ふ」とある。これによれば、河上淀姫神社は『八幡愚童訓』の語るような活躍をしたので、正月7日に国司が参詣して、庭上に「新羅国の大王は日本の犬也」と書くことを常例としていたのである。

また同書によれば、九州の「武雄大明神と申奉るは神功皇后異国退治の御時の武内大臣也。故に神明御在世の名を所に寄せ武雄の里と云ふ」とあって、武雄神を武内宿禰のこととする一方、温泉については、「又柄崎の湯は神功皇后御戦の時数多の御疵を蒙り給ひ大刀を杖につき給ひ岩に倚掛り、此疵洗ふべき湯有と御大刀の柄を以て岩の側を突給はば忽湯湧出けり。皇后暫く観念させ給ひ此湯を以て疵を洗ひ給はば其儘疵は癒させ給ふと也」として、武雄温泉の由来を神功に帰しているのである。

室町時代のもと思われる『高良玉垂宮御縁起』によれば⁽⁸⁾、住吉本地の住吉大神と高良本地の月天子が中心人物として登場するが、豊姫を竜宮に遣わして、旱珠満珠を借りて来させたこと、その両珠を用いて「三韓」を征服し、三韓王は「日本犬也」として、御間(任那)を守らせるようにしたことなどの主要事は、みな高良神の活躍によるものである。大善寺には、

「鬼夜」と呼ばれる追儼式があり、日本三大火祭りの一つに選ばれているが、これは毎年正月7日の夜に行われ、県の無形文化財に指定されている。その由来は、高良大菩薩が「三韓征伐」に先だって、桜桃沈輪^{ゆすら}を退治した伝説に基づくという。

また延元元年(1356)、円忠著『諏訪大明神絵詞』上によれば、活躍した神は「諏訪住吉二神」とし、さらに「皇道太平は諸神一同の守護なりと云へども、異賊の征伐専当社の靈験也」として、諏訪神を中心としている。これは『太平記』巻39に通ずるもので、そこでは諏訪・住吉大明神を副将軍としたという。

このような中世的神功物語は、秀吉の朝鮮侵略の際には西日本各地に流布していた。吉川広家の従軍僧宿盧俊岳が、忠州で神功のことを回想し、「唐土王者は日本の犬也」と石に刻んだことは、世俗の人口に膾炙しているとも書いていることも、それを裏付ける。もちろん、秀吉自身もそのようなことを十分に意識していたことは、「大かうさまくんきのうち」によると、祐筆山内橘内が筑前志賀島吉祥寺(志賀海神社の実権を握っていた)に伝わる「神功皇后異国退治物語」を秀吉に献上したことでわかるが⁽⁹⁾、秀吉が好んで神功を主人公とした謡曲、『弓八幡』を自演したことでも推察されるところである。

近世は、中世的神功物語が祭礼や舞台芸能にともなってより深く浸透する一方、木版印刷の発展により、知識層の間では『日本書紀』の神功が主流となっていった時期でもある。ここでは主に前者の場合について考察してみたい。

最も注目されるのは祭礼である。とくに日本三大祭りと称された京都の祇園祭り、江戸日枝山王権現祭り、神田祭の曳山に中世的神功が登

ノ 篇44』神道大系編纂会、1982年。

(8) 小林健二「大善寺玉垂宮縁起の絵解き」、『絵解き—資料と研究』、三弥井書店、1989年。

(9) 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館、1995年、59～61ページ。

場し、民間に浸透した⁽¹⁰⁾。

その先駆となったのは京都祇園祭りである。祇園祭りに曳山（山鉾）が登場するのは、文献的には『本朝世記』15・一条天皇長保元年（999）6月のことであるが、その内容の詳細はよくわかっていない。祇園祭りに山鉾が開花するのは室町時代で、『祇園社記』15には、応仁の乱以前の山鉾名が記されていて、そこにはすでに「しんくくわうくうの舟」の存在が明記されている。それは江戸時代に継承され、占出山と出征船鉾・凱旋船鉾の三基となった。占出山は神功が出陣する前に鮎を釣る人形であるが、延宝2年（1674）の「縁起」には、『太平記』を引用して、旱珠満珠の使用、「高麗乃王」を「犬」と岩に刻したことを記している。出兵自体をモチーフとした二基の船鉾については、例えば宝暦7年（1757）に刊行された『祇園会細



『祇園会細記』宝暦7年(1757)刊。

塚本論文による。

記』にその図が描かれている。それによると、館の中に神功が鎮座し、その後ろに鹿嶋明神、前に大將軍の住吉大神が立っている。そして船の舳先に住吉明神と正対しているのが、海神の安曇イソラである。それはすでに慶長期（1596～1614）中期の山岡家本『洛中洛外図』におよそその姿が描かれている。祇園祭りは現在まで盛行しているが、現在では凱旋山鉾は中止されている。とはいえ、出陣船鉾は山鉾巡行のクライマックスとして最後を締めくくり、強い印象を与えているのである。

神功は石を裳にまとして出産を延ばし、凱旋後に応神を生んだとあるので、安産の神として崇敬を受け、祭りでは安産の札さえ配られた。都での祇園祭りの影響は甚大なものがあり、京都伏見の御香宮神社、藤森神社の祭神が神功や武内宿禰になっていることも、その一端を物語ると言えるであろう。

日本三大祭りであり、江戸の天下祭りとして隔年交代で執行されたのが、神田祭と日枝山王権現祭りである。山王祭りは46番、神田祭は36番で、幕府公認の祭礼として、江戸城内へも巡行して、將軍をはじめ幕府要人の上覧を受けた。元禄期の曳山には神功はまだ登場しなかったが、ただ一度だけの天下祭りとして行われた正徳4年（1714）の根津祭りに、5番として「神功皇后の屋台」、20番として「神功皇后馬乗りの屋台」が出ており、それが神功登場の嚆矢であったらしい。

龍ヶ崎市歴史民俗資料館所蔵の『神田明神祭礼絵巻』には、寛政元年（1789）以前の神田祭りの様子が筆写されているが、その中の7番に「住吉明神の山車」、11番に「朝鮮人来朝の練物」、31番に船形の神功の「三韓攻の山車」が活写されている。「三韓攻」図とともに、「朝鮮人来朝」

(10)以下については、塚本学「神功皇后伝説と近世日本の朝鮮観」（『史林』79-6、1996年）、黒田日出男「天下祭り絵巻の世界」（同『王の身体・王の肖像』平凡

社、1993年）、作美陽一『大江戸の天下祭り』河出書房新社、1996年を参考に行っている。



住吉明神（船鉾）



皇后（船鉾）

文安期の古面⁽¹¹⁾

のことが出ているのは、古代的観念から江戸の朝鮮通信使をみなしていることを意味しよう。

このように、18世紀には天下祭りに神功の曳山（山車）が出ていたことがわかるが、それは文化9年（1812）の神田祭り、天保9年（1838）の山王祭りでも確認されている。

三大祭りの影響を受け、祭礼に神功が登場するのは普通のこととなった。有名な九州の博多祇園祭りでも、常例ではないが、神功と武内宿祢が顔を出している⁽¹²⁾。その他、確認されるものとして、文化4年深川富岡八幡宮祭礼・文化6年赤坂永川大明神祭礼の例がある。

近世には舞台芸能も発展したが、神功はその恰好な材料の一つとなった。外題からそれと分かるものだけでも、元禄8年（1695）正月2日から大阪嵐三右衛門座で初狂言として「神功物語、附り、三韓退治」が、同10年3月には江戸中村座で「一張弓勢三韓退治」が、正徳5年（1715）正月10日からは、大阪の八重桐座で顔見世興行の一つとして、『神功皇后三韓退治芦分船』が上演されている。年紀は不明だが、『神功皇后諫太鼓』の名も知られている。

脚本が残っているものとしては、享保4年（1719）初演の浄瑠璃本で、紀海音作の『神功皇后三韓責』がある。この作品には独自の脚色が多いが、なかで「三韓退治」・「三韓責」・「蛮賊」などの語をしきりに用いている。そして干珠満珠を用いて「三韓」を降し、岩に「三韓王は日本の犬なりと大文字に書き給」ふたとあるのは、中世的物語そのままである。

第三節 近現代の神功

明治政府の朝鮮植民地政策の下で、神功と秀吉は史上最大の英雄として、教育を通じて国民全般に教え込まれた。明治政府が樹立されるや否や、豊国神社が再建されて秀吉讃美が開始されたが、秀吉はあくまでも失敗者であった。それに比べ、神功は遙か昔の古代に朝鮮諸国を服属させた、日本第一の英雄であった。したがって、それは小学校の教科書から特記され、日本国民の必須の知識とされた。

江華島条約以前の教科書、たとえば『官版史略』皇国一（1873、明治6年）では、「神功皇

(11) 祇園祭編纂委員会・祇園祭山鉾連合会編著・林雅彦

ほか編『祇園祭』三弥井書店、1989年、154ページ。

後の三韓征伐」をわざわざ挿絵まで載せている点で、それ以後の教科書の基本を示した。しかし、その叙述はまだきわめて簡単であった。ところが、1892年（明治25）出版の『帝国小史』からは、『日本書紀』をもとに詳述され、新羅が「東方の神兵」に屈服したと述べ、さらに「神功皇后征韓路次」なる地図も掲げ、「日本の植民地」たる広大な「任那」の「領域」を明示し、視覚的にも訴えるようになった⁽¹²⁾。神功はその後もだんだんと美化されてゆくが、次に参考資料として前期、中期、後期の3種類の教科書の叙述を紹介しておく。

1. 『帝国小史』（明治25年）

第五 神功皇后の三韓征伐

第十四代仲哀天皇の時、熊襲また叛けり。天皇親征して筑紫に到り給ふ。皇后曰く、「海外に新羅といふ国ありと聞く、先づ之を征し給へ、熊襲の如きは、兵を煩はすにも及ぶまじ」と。されども、天皇之を聴き入れ給はず、かゝる内に、暴に崩じ給へり。皇后武内宿祢と謀り、兵を遣して熊襲を伐ち、親ら新羅を征伐せんとぞ企て給ひける。皇后は、開化天皇五世の孫にましまして、知勇両ながらすぐれ給ひしかば、後御諡を奉りて、神功皇后と称へ申す。

かくて皇后は、親ら戦艦を帥ゐて新羅にわたり給ひしに、新羅王大に懼れ、御船の前に出でて降参し、「願くは長く属となりて貢物を奉らん」と請ひければ、皇后之を許して国都に入り給ふ。国王質子を出だし、金銀絹帛八十船を献じたり。爾後之を歳貢の定額とせり。是に於て高麗百済の二国にも、亦風を望みて降りしかば、官司を其国々に置きて、師を旋し給へり。

皇后筑紫に還りて皇子を生み給ふ。後に御即位ありし応神天皇是れなり。皇后大和に還りて、親ら政を摂し給ふこと六十九年にしてかくれさ

せ給へり。

2. 『尋常小学国史』上巻（大正9年）

神功皇后

仲哀天皇の皇后を神功皇后と申し、御生れつき賢くををしくましませり。天皇の御代に熊襲またそむきしかば、天皇は、皇后と共に九州にみゆきして之を討ちたまひしが、いまだ平がざるうちにかくれたまへり。

此の頃朝鮮には、新羅・百済・高麗の三国ありて、之を三韓といへり。中にも新羅は最も我が国に近く、且その勢強かりき。されば皇后は、まづ新羅をしたがへなば、熊襲はおのづから平がんとおぼしめし、武内宿祢とはかり、御みづから兵をひきゐて新羅を討ちたまふ。時に紀元八百六十年なり。

皇后は御出発の前、香椎の海べに出で、御髪を解き海水にて洗ひたまひて、男の如くみづらといふ髪のようにゆひ、人々に向ひたまひて、「われ今かりに男のすがたになりて軍をひきゐ、神々の御たすけと汝等の力によりて新羅を討ちしたがへん。」と仰せられしに、武内宿祢をはじめ一同つゝしみて、「仰にしたがふべし。」と答へたてまつれり。

皇后舟いくさをひきゐて対馬にわたり、それより新羅におしよせたまふ。軍船海にみちみちて、御勢すこぶる盛なりしかば、新羅王大いに恐れていはく、「東の方に日本といふ神国ありて、天皇といふすぐれたる君いますと聞く。今来れるは、必ず日本の神兵ならん。いかでかふせぎ得べき。」と。たゞちに白旗をあげて降参し、皇后の御前にちかひて、「たとひ太陽西より出で、川の水さかさまに流るゝ時ありとも、毎年の貢はおこたり申さじ。」といへり。やがて皇后凱旋したまひしが、其の後百済・高麗の二国もまた我が国にしたがへり。

(12)中塚明『近代日本の朝鮮意識』研文出版、1993年、

かくて、これより朝鮮は天皇の御徳になびきしたがひ、熊襲もおのづから平げり。又第十五代応神天皇の御代に、王仁といふ学者など百済より来りて学問をつたへ、機織・鍛冶などの職人も、おひおひ渡り来りて、わが国ますます開けしは、全く神功皇后の御てがらに基づきしなり。

3. 『初等科国史』上（昭和19年）

神 国

（前略） ついで、仲哀天皇がお立ちになつてまもなく、またまた熊襲がそむきました。天皇は、神功皇后とともに、将兵をひきゐて、筑紫へおくだりになりましたが、熊襲がまだしづまらないうちに、おそれ多くも行宮でおかくれになりました。皇后は御悲しみのうちにも、新羅が熊襲のあと押しをしてゐることを、お見やぶりになり、武内宿祢の考へをもおくみになつて、いよいよ、新羅をお討ちになることになりました。紀元八百六十年のことです。

国々からは、勇ましい将兵や多くの軍船が、お召しに応じて、次次に松浦の港へ集まつて来ます。まことに、細戈千足の国の力づよさを思はせる光景であります。皇后は、うやうやしく神々に戦勝をお祈りになり、将兵は、決死の覚悟をちかひました。折からの追風を帆にはらんで、軍船は矢のように、海面をすべつて行きました。

おどろきあわてたのは、新羅王です。「音にくく日本の船、神国のつはものにちがひない。」と思つて、王はすぐさま皇后をお出迎え申しあげ、二心のないしるしに、毎年かならずみつぎ物をたてまつることを、堅くちかひました。勢こんだ将兵の中には、王を斬らうとするものもありましたが、皇后は、それをとめて降伏をお許しになり、王が真心こめてたてまつた金・

銀・綾・錦を、八十艘の船に積んで、勇ましくめでたくお帰りにになりました。

こののち、熊襲がしづまつたのはいふまでもなく、百済や高句麗までも、わが国につき従いました。日本のすぐれた国がらをしたつて、その後、半島から渡つて来る人々が、しだいに多くなりました。このやうに、国内がしづまり、皇威が半島にまで及んだのは、ひとへに、神々のおまもりと皇室の御恵みによるものであります。

教科書だけでなく、神功は、明治11年（1878）に発行された起業公債や、明治14年から発行された、日本最初の本格的な紙幣にその図柄が採用された。神功は西洋風の服装と風貌を示しており、それは明治の文明開化の欧化政策と古代への復古政策を象徴するものであった（次頁）⁽¹³⁾。

戦後、神功の実在性は否定され、教科書からも一斉に姿を消した。しかしそれで、神功はまったく忘れられたわけではない。いまだにその実在を主張する遺跡や祭礼などが残っているからである。

①. 神功を主神とする神社

博多の香椎宮、京都の御香宮神社と藤森神社。その中でも重要なのは神功物語の出発点となった香椎宮で、同社発行のパンフレットには次のようにある。

（前略）熊襲の平定に來られたものだが、不幸なことに志なかばにして仲哀天皇は崩御されました。その御胸中を偲び、見事に継いだのが、神功皇后。御島で男装に扮して、九州はもとより三韓など海外へ国威を知らしめました。海外からの朝貢はその後絶えることなく、同時に文明も陸続として導入されました（後略）。

(13) 郡司勇夫編『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社、

1981年、124、280～281ページ。



『日本書紀』によれば、神功を祀る神社はもう二つある。摂津の長田神社と生田神社である。長田神社のパンフレットに、「神功皇后摂政元年二月、皇后が新羅より御帰還の途中、武庫の水門に於て＜吾を御心長田の国に祀れ＞とのお告げにより、山背根子の女、長媛をして創祀せしめられた全国有数の名社である」と記す。生田神社のパンフレットには、『日本書紀』が記すように、神功の荒魂が祭られたとある。

②. 祭 礼

京都祇園祭りでは、現在も占出山と出陣船鉾

が出行している。同社発行のパンフレットに、「船鉾。全体を船に象り、神功皇后船出の状をうつしています。緋緘鎧に腹帯を結ばせられるのが皇后の像。これに従う住吉・鹿嶋の神々などの像を祀っています。皇后の神面は安産の奇瑞があり宮中を始め庶民の信仰が篤い。」とし、「占出山。神功皇后が九州玉島川で鮎を釣って占われた説話を象ったもので、この尊像は古来安産の守護神として宮中を始め一般の篤い信仰を受けています」とある。

日枝山王権現祭りには昔日の悌がないが、それでも展示館に等身大の神功と武内宿祢像が陳



占出山 錦小路通室町東入



船鉾 新町通綾小路下



列されていて、ギョッとさせる。

③. その他の神社

『日本書紀』に神功物語として関係する最も重要な神社は住吉神社である。撰津住吉神社のパンフレットには、「神功皇后は、新羅出兵に先立って、住吉大神の御加護を得て大いに国威を輝かせられ、御凱旋の後、大神の御神託によって此の地に御鎮祭になりました。」とある。

『日本書紀』天平9年(737)初見の博多の住吉神社のパンフレットには、「約千八百年前、神功皇后の三韓の御渡航に際し、住吉大神の荒魂は水軍をお導きになり、和魂は胎中天皇と申し上げた応神天皇の玉体をお守りになり、刃を用いずして御帰還遊ばすことができました。」とし、さらに10月13日の例祭は、神功の指示によったものであると記している。

神功に託宣を下した事代主神の場合も同様である。その本拠地は奈良県御所市の鴨都波神社

であるが、その説明板には、「御祭神は、宮中八神の一つとして尊崇され、神功皇后の朝鮮遠征や天武天皇の壬申の乱に御神託を授け給ひし神徳高き神である」としている。

このように、主に『日本書紀』の記述をそのまま由縁とした神社は少なくない。住吉神社だけでも二千有余を数えることからしても、神功物語は決して死んだとはいえないのである。

おわりに

神功物語ほど、歴代の日本人に刻み込まれた英雄、排外的な人物はいない。そしてその対象は朝鮮であるから、近代以後の朝鮮人にもっとも深い痕を残した。それは虚構の物語であるが、両国友好の立場からしても、清算されなければならない存在であろう。神政を由縁とする神社や祭礼をどうするのか、今改めて問われているといえよう。